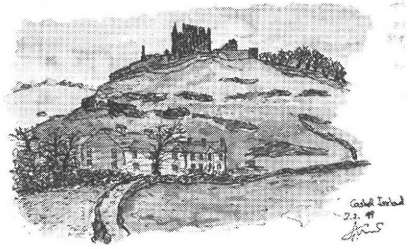


ESSAY

アイルランド妖精紀行

森 武生

都立駒込病院外科



どうも最初からなんとなくおかしかった。たしかに日本にいる間にアイルランドというところには今でも妖精が住んでいて、道路にも「妖精が通る注意!」という標識があるそうで、人々もみんな妖精と仲良くやっているらしいといって歩いた。どうもこれが時差をこえてちゃんとアイルランド妖精には伝わっていたらしく歓迎の用意をしていたようだ。ロンドンのヒースロウ空港で首尾良くアイルランドダブリン行きの飛行機の搭乗券を手に入れ、ゲイトの入り口で実にうまいアイルランド地ビールと地エールをたらふく飲んで、ほろ酔いで英国本土を飛び立ったところまでは順調であった。

妖精の奴も最初はなんとかのごとくで楽しませてやろうと思っていたらしい。ダブリン空港はヨーロッパ田舎空港らしくこじんまりとしたしかしどことなく人なつこい暖かい雰囲気のあるところで、清潔な感じはコペンハーゲンの空港に似ていた。同行した当院外科チーフレジデントの Dr. Mz の働きでレンタカーを借り出しに成功。意気揚々と夜のアイルランドへ繰り出した。ダブリン市街に入るとけばけばしいネオンは一切なく、ナトリウム灯のオレンジ色の夜気のなかに、その色のせいかな、思ったより寒くない感じの日本の県庁所在地の地方都市の風景が広がっていた。コートをつまみながら家路につく人たちと、夜

の町に遊びに出る若い人たちが街角をすれ違い、それを古い石造りの建物が見おろしていた。

ホテルの駐車場に車を入れ、ドアをあけて外へ出たとたんにかばんの肩紐がはじけ飛んだ。買って半年もたっていないコンピューターを入れるためのしっかりとしたかばんの金具が実に見事に吹っ飛んでいた。なんでこんなことが? 変な感じはしたが、まあまあこんなこともあるのかな、と手で下げればいいやとあきらめた。夜はアイルランド料理の魚介類チャウダーのうまさに剋目しつつ、どこでもうまい地エールに満足、満足。

さて翌日は 250km 離れた Galway の町を目指してアイルランドを横断し、アラン島へのフェリーに乗るつもりで、暗いうちに出発。ちょこちょこ間違えながらも無事 Galway に行く準高速道路に入った。ちょうど日が昇り、広々とした一面の牧草地を枯れ木が囲い、うっすらと霧がかかったなかを羊の群れが三々五々たむろしている。空は信じられないようなスミレ色で、窓を閉めるとガラスの遮光材によって単なる青になってしまうので、寒いのを我慢して開け放して走った。大陸の牧草地と違い、どこどことなく穏やかな雰囲気があった。これがアイルランドらしい特徴であることは、この後の旅行でもわかった。

ところが!! なぜだかわからないが、行け

ども行けども着かない。平均で100km近いスピードなのに目的地が近づかないのである。だんだん焦ってきたが着かないものはしょうがない。実は翌日同じような距離を同じ時間帯に走ったが、なんと半分くらいの時間で着いてしまった。この時の時間のかかり方はどう考えても妖精の作為があるとはしか考えられなかった。

妖精はとにかくアラン島へ行くのに反対だったようだ。Galway を過ぎると景色は一変する。どんどん荒地になり、泥炭の褐色の湿地帯に岩がごつごつと地表に露出し、そこを低い丈の石垣が囲む、なんだか異次元世界のような雰囲気になった。フェリーの出発時間に遅れること1時間、やっと船着き場に着いたが、もちろん船はいない。遅い朝飯をとって荒地を横切りアイルランドの南へ行くことにした。

このとき横切ったコンノート地方の景色はきつと忘れることがないだろう。世の中の地の果てのような、荒涼という言葉の他に絶望という言葉を加えたようなすさまじいところで、それまでの道中が美しかっただけに心にひびいた。この月世界のような荒地に本来カトリックのアイルランド人たちは、イングランドの植民地だった数百年の間追いやられていたようで、彼らの英国本国とプロテスタントたちに対する恨みの深さが推察される。

やっと荒地を横切り緑の深い村に入ると、急に陽光も暖かくなった。Galway に行きと違い北から接近していったとき、突然運転していた Dr. Mz が「先生！ ケルト十字架だらけ!!」と奇声を発した。ケルトとカトリックの混合文化の典型であるケルト十字架の話は、彼によくしてきて、今回の旅行の目的の一つが、たくさんケルト十字架をみたいということであった。路傍の塀に囲まれた墓地

らしいところにケルト十字架がいくつも見えたが、あつという間に行き過ぎてしまった。

3分くらいしてからやっぱり見に行こうかと引き返したのこそ、妖精の招待だったのだろう。壊れた門の隙間から中に入ると、崩れかけて蕩の絡まる教会の廃虚を中心に無数のケルト十字架が思い思いの傾きをしてたっていた。暖かい春のような日差しの中の十字架たちは、妖精の舞踏を思わせる自由な美しさだった。半分酔ったような気分で一枚スケッチを描いた。このとき疲れていたこともあって、一基の十字架の下の墓に座って描いたのがどうも気に障ったらしい。喜んで絵をしまって、そろそろ昼も過ぎてしまい、南のリムリックへ行くには忙しい時間になっていたので墓場を去った。

南へ2時間、Galway の対岸に至り、ふと振り返ると、岩だらけの山の間石垣に囲まれた牧草場が広がり、遠くに Galway 湾を望む峠に出た。またまた喜んで絵を描こうとして、なんと！ 絵の道具一式がない。あるのはスケッチブックとペンだけ。いくら老人ポケといっても、まさか大事な水彩一式をなくすことはない。やられた！ 墓場にたむろしていた妖精どもに——。今になっても忘れてきたとは全く思えないし、そのときも不思議と全く残念とか悔しいとか、しまったとか思わなかった。ただただやられたと思っていた。

彼らは、アラン島へ行かせずに、折角彼らの墓場へご招待したのに墓に腰掛けるなどという不敬な態度を怒ったのだろう。ちよいと悪戯をされたようだった。うぬっ、と思いつつも旅をつづけたが、それからあとは妖精諸君もやややりすぎたと思ったのか、結構うまくいった。リムリックで魔女のような、でもじつはとても親切なばあさんの B & B にとまり、翌日は、ガイドブックにもない表紙の

絵の Cashel の修道院跡にも巡り会え、実に楽しくアイルランドを満喫できた。

夜景の美しいダブリンを発ち、学会の開催されるパリに向かうとき、飛行機の窓から、妖精たちに、是非またお会いしましょうと丁

重に挨拶した。

皆さん、アイルランドへ行くときには妖精諸君に十分なる敬意を日本にいるときから払わないと、世界が狭くなっていることでもあり、悪戯をされますぞ。